

日本語学習者を対象とした相づち研究の概観

柳 川子

要 旨

本稿の目的は、日本語学習者を対象とした相づち研究を中心にこれまで行われた調査方法と調査結果から明らかになったことをまとめること、さらに今後の相づち研究に新しい方向性を提示することである。相づち行動には言語行動と非言語行動が含まれているが、本稿では、非言語行動の相づちを除外し、主に日本語学習者を対象とする言語行動の相づちに限定する。ただし、必要に応じて非言語行動に若干言及する部分もある。本稿は、機能、表現形式、相づち詞の種類、頻度、タイミング(出現場所)、相づち変化の要因、談話展開という観点からそれぞれ整理分析する。日本語学習者の言語行動の相づちに関するこれまでの研究の流れがどのように進められてきたかをレビューし、その成果をまとめる。そこから、日本語学習者における相づちの使用実態の研究において、残された課題を整理する。

【キーワード】相づち、相づち詞の種類、機能、頻度、日本語学習者

1. はじめに

80年代に入ってから、相づちは日本語の会話を円滑に進めていく上で必要不可欠な要素として注目され始め、その機能、表現形式、頻度、タイミングなど様々な観点から研究されてきた。その頃の相づちの研究対象は主に日本人によって使用された相づちであった。90年代になってから、日本語教育の観点からの相づち研究に目が向けられるようになり、堀口(1990)をはじめ、本格的に日本語学習者のデータを取り扱った様々な研究が行われてきた。この十数年間、日本語学習者における相づち研究は盛んになり、各種の角度から学習者が使用している相づちの実態を明らかにしようとしている。本稿の目的は、日本語学習者における相づち研究を中心に、これまでどのような調査が行われ、どのような調査方法がとられてきたか、調査結果からどのようなことが明らかになったかについてまとめることである。さらにまとめた結果から今後の相づち研究に新しい方向性を提示していきたい。相づちに関するレビューはすでに陳(2002)があるが、本稿では日本語学習者の相づち使用に関する論文を中心に論じることにする。

2. 日本語学習者における相づち研究

2.1 調査概要

日本語学習者における相づち研究は、日本語学習者がどのように相づちを使用しているかという、その使用実態を調査しないと研究は始まらない。これまでの研究でも、まず学習者の実態を調査することから始められている。

この節では相づち研究のうち、主として学習者を対象としたものを中心に、どのような母語の場合があるのか、どのような方法が行われたのかをまとめる。ここで母語別の研究と母語の異なる学習者に対する研究を大別し、調査内容のみをまとめ、各研究の結果については3で述べる。

2.2 母語別の研究

【英語母語話者】

母語別の研究では英語母語話者を対象とする研究が最も多い。これに該当するのは登里(1994)、Mukai(1999)、窪田(1999a, 1999b, 2000)、村田(2000)である。これらの研究では学習者の習得状況を観察するため、登里(1994)と窪田(2000)において、前者は一年、後者は半年の縦断研究がなされている。

登里(1994)は4名の初級学習者に週1回の授業を行いながら、定期的にデータを収集する方法を取

ている。月に約1回のペースで学習者が書いた日記に基づき1対1の自由会話をを行ったものを録音し、約1年間のデータを採集している。同じ縦断研究である窪田(1999a, 1999b)は初級・上級学習者各5名が初対面の日本人と1対1で自由会話をを行ったものを録音・録画している。窪田(1999a)と窪田(1999b)の違いはコントロールグループが異なるという点である。前者は日本人若者同士6組(12名)の会話であるのに対し、後者は学習者が年輩の日本人1名と行う会話である。窪田(2000)は初級学習者5名と日本人5名の1対1での会話を半年前と半年後に分け、2回のデータを取っている。

Mukai(1999)と村田(2000)の共通点は二つとも海外の滞日経験のある学習者を対象とした点である。Mukai(1999)は相づちの質と量の二面に焦点を当て、上級学習者と母語話者のペア5組と母語話者同士5組の日本語での自由会話、1組約30分を録音・録画しているのに対して、村田(2000)は、自由会話と情報伝達のための会話では相づちの機能が異なると予想した上で、2つのデータを取っている。1つは

日本人と初対面の学習者が2名1組で自由会話した時の録音テープであり、もう1つは日本人が同じ学習者と電話でアパート探しのロールプレイをした時の録音テープである。英語を母語とする日本語学習者の調査概要を表1にまとめる。

【中国語母語話者】

中国人学習者による相づち研究では楊(1997, 2001)が上げられるが、台湾出身の学習者も中国語を標準語として使っているため、台湾人学習者を対象とした今石(1998)、佐々木(2002)、柳(2002, 2003a, 2003b)の研究もここに入れることにする。

楊(1997)は学習者が日本語の相づちを使用する際に母語が目標言語の日本語にどのような影響を与えるかを考察するため、同じ場面での①中国人同士の中国語会話②日本人同士の日本語会話③中国人学習者と日本人の日本語会話を録音・録画している。その資料に基づき、相づちの形態、頻度、タイミングの視点から考察を試みた。その後、楊(2001)は上級学習者が使用する相づちの機能に着目して、日本人との相違点を明らかにするため、学習者10名と親

表1 英語を母語とする学習者の調査概要

論文 研究手法	レベル	分析データ (被験者人数)	調査方法	
			① 録音/録画 ② 面識の有無 ③ 話題・場面	① 実施場所 ② 滞日経験あり/なし
登里(1994) 縦断(1年)	初4名	・学習者(4名)と日本人(記述なし) ・日本人6組(7名)	①対面会話を録音 ②面識あり ③学習者が書いた日記に基づき、自由会話	①日本国内 ②来日前滞日経験なし
Mukai(1999) 横断	上5名	・学習者と日本人のペアで5組 ・日本人同士5組	①対面会話を録音・録画 ②初対面と面識ありの2種類 ③自由会話	①オーストラリア ②1年滞日経験あり
窪田(1999a) 横断	初5名 上5名	・初・上級(各5名)と日本人(5名)10組 ・日本人同士6組(若者12名)	①対面会話を録音・録画 ②初対面 ③自由会話	①日本国内 ②上級の2人は来日前1年滞日経験あり
窪田(1999b) 横断	初5名 上5名	・初・上級(各5名)と日本人(若者5名)10組 ・初・上級(各5名)と日本人(年配者1名)10組	①対面会話を録音 ②初対面 ③自由会話	①日本国内 ②上級の2人は来日前1年滞日経験あり
窪田(2000) 縦断(半年)	初5名	・学習者(5名)と日本人(5名)5組(半年前) ・学習者(5名)と日本人(5名)5組(半年後) ・日本人(12名)6組	①対面会話を録音・録画 ②初対面 ③自由会話 ④半年前と半年後の2回	①日本国内 ②上級の2人は来日前1年滞日経験あり
村田(2000) 横断	初3名 中4名 上3名	・学習者(10名)と日本人(1名)10組の対面会話 ・学習者(10名)と日本人(1名)10組の電話会話	①対面と電話会話を録音 ②初対面 ③自由会話とロールプレイ	①イギリス ②中級4名と上級3名が1年滞日あり

しい日本人の友達8名との電話会話を録音し、分析を行った。

これまでの調査対象者のほとんどは滞日を経験した学習者である。柳(2002, 2003a)は海外で日本人とあまり接触したことがなく、日本に長期滞在した経験のない学習者の相づちはどのように習得されるのかを考察するため、滞日を経験したことがない中級学習者14名・上級学習者6名による日本人1名との1対1による電話会話を録音し調査を行った。また上級学習者が使用する相づちの種類は日本人とどのように異なるかを調査するため、同じ状況下で日本人同士の電話会話を録音し、両者の相違点を比較している。

佐々木(2002)は初対面同士の相談場面における聞き手の相づちに注目し、自国で2年から2年半日本語を勉強した後、来日したばかりの台湾人学習者4名に対し、日本人との相談場面での会話を録音し、機能の観点から分析した。今石(1998)は

前述の調査方法と異なり、相づちの使用実態を分析した上で、被験者の使用意図のような内省的な観点からも考察を行っている。具体的には1名の学習者が日本人と対面して行った30分のフォローアップ・インタビューによる談話資料を基に日本語母語話者同士(今石1993aのデータ)との相違点を明らかにした上で、相づちの使用意図も確認している。中国語を母語とする日本語学習者の調査概要を表2にまとめる。

【韓国語母語話者】

日韓の相づち対照研究では生越(1988)と任・李(1995)があるが、韓国語を母語とする学習者の研究はあまりなされていない。生越(1988)は韓国大学生が書いたレポートを分析資料とし、韓国語の相づちを考察している。任・李(1995)は韓国人と日本人の相づちの頻度、相づちのイメージ、先取りのイメージなどについて、聞き取り調査とアンケート調査を行い、対照言語学的な観点から考察

表2 中国語を母語とする学習者の調査概要

論文 研究手法	レベル	分析データ(被験者人数)	調査方法 ① 録音/録画 ② 面識の有無 ③ 話題・場面	①実施場所 ②滞日経験あり/なし
楊(1997) 横断	レベル (未記述) 12名	・中国人同士の母語会話 12組(13名/話し手が固定) ・中国人と日本人の日本語会話 12組(13名/話し手が固定) ・日本人同士の母語会話 6組(7名/話し手が固定)	①対面会話を録音・録画 ②初対面 ③情報をもらう場面での自由会話	①日本国内 ②日本の大学で勉強
今石(1998) 横断	自国で4年間勉強した1名	・学習者(1名)と日本人(1名)	①対面会話を録音 ②面識あり ③現代日本語文法についての話	①日本国内 ②来日したばかり
楊(2001) 対照	上10名	・学習者(10名)と日本人(8名)10組	①電話会話を録音 ②親しい友達 ③雑談形式	①日本国内 ②日本に在住
佐々木(2002) 横断	中1名 上3名	・学習者(4名)と日本人(4名)4組	①対面会話を録音 ②初対面 ③相談場面	①日本国内 ②来日したばかり
柳(2002, 2003a) 横断	中14名 上6名	・中級(14名)と日本人(1名)14組 ・上級学習者(6名)と日本人(1名)	①電話会話を録音 ②初対面 ③身近な話題に沿った自由会話	①台湾 ②滞日経験なし
柳(2003b) 横断	上5名	・学習者(5名)と日本人(1名)5組 ・日本人同士4組(5名/話し手が固定)	①電話会話を録音 ②初対面 ③身近な話題に沿った自由会話	①台湾 ②滞日経験なし

を行っているが、この二つの研究は学習者を対象とするものではないため、ここでこれ以上詳しく述べない。韓国人学習者を対象とした李(2001)の調査方法を見ていく。先に上げた英語母語話者、中国語母語話者の論文は、ほぼ学習者が用いる相づちの使用頻度や表現形式やタイミングなどに関する実態調査であるが、李(2001)は議論の場において、話し手に配慮しながら相手と異なる意見を述べる際の日本人

と韓国人学習者の相づちの使い方について考察を行っている。調査方法としては、お互いに面識のない二人にディベート形式のロールカードを渡し、10分ほど会話してもらい、10分後に、話をまとめて終らせるよう指示を出すというものである。また話題に関しては、事前に被験者の趣味や意見を聞き、それに近いものを選んで与えている。韓国語を母語とする日本語学習者の調査概要を表3にまとめる。

表3 韓国語を母語とする学習者の調査概要

論文研究手法	レベル	分析データ (被験者人数)	調査方法 ①録音/録画 ②面識の有無 ③場面	①実施場所 ②滞日経験あり/なし
李(2001) 横断	未記述 (大学院生)	学習者(8名)と 日本人(8名)8組	①対面会話を録音 ②初対面 ③ディベート形式のロールプレイ	①日本国内 ②日本の大学院で勉強

※被験者のレベルに言及していないが、日本語学習歴が一番短い人でも2年学習したことから上級だと判断してもいいと考えられる。

【ベトナム語母語話者】

日本に定住しているインドシナ難民は様々な問題を抱えており、日本語習得に関する問題が大きいと考えられる。相づちの観点から彼らのコミュニケーション問題を考察したのは吉本(2001)のみである。吉本(2001)は日本に定住するベトナム難民を対象に日本人との1

対1の面接形式での会話を録音している。彼らは定住促進センターにおいて日本語教育を受講した後、日本で社会生活を営んでいる者である。会話はごく身近な生活の話題にそって行われている。ベトナム語母語話者を対象とする日本語学習者の調査概要を表4にまとめる。

表4 ベトナム語を母語とする学習者の調査概要

論文研究手法	レベル	分析データ (被験者人数)	調査方法 ①録音/録画 ②面識の有無 ③場面	①実施場所 ②滞日経験あり/なし
吉本(2001) 横断	未記述 (日本在住 2-10年)	学習者(20名)と日 本人(1名)20組の対 面会話	①対面会話を録音 ②面識あり ③身近な話題に沿った自由会話	①日本国内 ②日本に2-10年在 住

2.3 母語の異なる学習者を対象にした研究

母語の異なる学習者を対象とした研究には堀口(1990)、山本(1992)、渡辺(1994)などが上げられる。主に中国語・韓国語・英語を母語とする被験者が多い。堀口(1990)は学習者の聞き手としての働きかけの実態を明らかにしようとするため、日本の大学院で勉強している、上級と見なされる14名の学習者を、ペアで自由会話させた発話データを用いた。山本(1992)と渡辺(1994)は学習段階と相

づちの使用能力との相関関係を考察するため、「日本人に興味についてインタビューする」という課題を学習者に与え、日本人に電話でインタビューする会話を録音している。堀口(1990)は学習者同士の会話を録音しているのに対し、山本(1992)と渡辺(1994)は学習者と日本人との1対1の会話を録音している。

異なる母語話者を対象とする学習者の調査概要を表5にまとめる。

表5 異なる母語話者を対象とする学習者の調査概要

論文 研究手法	レベル	分析データ (被験者人数)	調査方法	
			①録音/録画 ②面識の有無 ③話題	①実施場所 ②滞日経験あり/ なし
堀口 (1990) 横断	韓・タイ・ 台・エジプト 上14名	・学習者7組(14)名 (学習者同士の会話)	①対面会話を録音 ②面識あり ③自由会話	①日本国内 ②日本の大学院 で勉強
山本 (1992) 横断	中・英・韓 初3名 中4名 上2名	・学習者(9名)と日本 人(1名)9組 ・日本人同士1組(2 名)	①電話会話を録音 ②初対面 ③趣味についてインタビ ュー	①日本国内 ②滞在経験あり
渡辺 (1994) 横断	中・英・韓 初6名 中8名 上5名	・学習者(19名)と日本 人(1名)19組 ・日本人同士3組(4 名)	①電話会話を録音 ②初対面 ③趣味についてインタビ ュー	①日本国内 ②日本で勉強

3. 分析観点および結果

以上、学習者を対象とした研究を概観してきた。次はこれらの調査方法によって得られた資料をどのような観点に沿って分析するのかみていきたい。以下、機能、表現形式、相づち詞の種類、頻度、タイミング(出現場所)、相づち変化の要因、談話展開という観点からそれぞれ整理分析する。

3.1 機能

相づちの機能として、各研究者に認められているのは(1)「聞いていると言うことを伝える」と(2)「分かったということを示す」という働きである。しかしながら、このほかに機能を認めるか、また認めるとしたらどのような機能かという点になると、いくつかの相違点が見られる(堀口1991)。堀口(1988, 1997)は前述の二つに、(3)「同意の信号」(4)「否定の信号」(5)「感情の表出」を付け加えて5つの機能を認めている。松田(1988)はこの五つの機能に(6)「間をもたせる」を加え、「次にどちらが話し始めるまで、余韻のように続けられるもの」と説明している。しかし、メイナード(1993)はこれを言いよどみ(埋め込み表現)の一種として、相づちとしない。メイナード(1993)は日本語の会話および英語の会話での相づちに共通する機能としては①続けてというシグナル②内容理解を示す表現③話し手の判断を支持する表現④相手の意見、考え方に賛成の意志表示をする表現⑤感情を強く出す表現⑥情報の追加、訂正、要求などをする表現の六つが相づちの機能として認めている。

学習者の相づち研究において、機能の観点から

分析した論文としては Mukai (1999)、村田(2000)、楊(2001)、佐々木(2002)などが上げられる。

Mukai (1999)は上級学習者と日本語母語話者が使用した相づちを「知らせ」機能と「態度」機能に二分類し、その割合を調べている。「知らせ」機能というのは聞いている、理解したということを知らせる相づちを指す。「態度」機能というのは聞き手が話し手の言うことをどう感じたかを示す相づちを指す。その結果、上級学習者の場合はただ単に聞いている、理解したということを示す「知らせ」の相づちがより多く、自分がどう感じたかなどの「態度」の相づちがより少ないことが分かった。一方、日本語母語話者は上級学習者と反対に、「態度」の相づちが「知らせ」の相づちより多く使われているという結果となっている。この結果から上級学習者は聞き手としてあまり積極的に会話に参加していないということが言えると Mukai (1999)は述べ、上級学習者の相づち指導においては、「聞いている」、「理解した」ということだけではなく、話し手の発話に興味、共感、同意などを表す相づちを指導する必要があると結論づけている。

楊(2001)は対照の観点から、中国人学習者と日本人が使用している相づちの機能を①「聞いている表示」②「理解・了解の表示」③「同意・共感の表明」④「感情の表出」に分類する。この分類のうち、①と②は Mukai (1999)の「知らせ」に、③と④は「態度」に相当する。その結果、「聞いている表示」「理解・了解の表示」「同意・共感の表明」の機能を持つ相づちは学習者がほぼ日本人

と同じぐらい使用している。一方、「感情の表出」だけは日本人より少ないことが分かった。この理由の一つとして、「中国人には相づちで容易に自分の意見や感情、態度を示すべきではないという考え方がかなり強い」と述べている(楊2001: 53)。中日の会話スタイルが異なるため、中国人学習者は「感情の表出」を表す相づちが日本人より少ないという結果をもたらした原因の一つと考えられると楊(2001)が述べている。しかしながら Mukai (1999)の研究では、英語を母語とする学習者に対する調査でも「態度」を表す相づちが日本人より少ない結果が出ている。このことから「感情の表出」をあまり使わない現象は中国人学習者だけではなく、母語に関わらず、日本語学習者に一般的に起こる現象と考えられる。これについて、相づちの使用は様々な要素と絡んでいるため、新たな調査結果を待たなければならない。

次は相談場面における台湾人学習者の相づちと日本人の相づちの相違を考察した佐々木(2002)の論文である。佐々木は以下の四つを相づちの機能とする。

- (1)質問と答えのみの応答であいづちを含まないもの
- (2)聞いていることの表明
- (3)理解・了解の表明
- (4)受容・同意の表明

調査の結果、学習者は(2)の「聞いていることの表明」の相づちが4割であるのに対し、母語話者の場合は(3)「理解・了解の表明」と(4)「受容・同意の表明」の相づちが半数以上を占めている。この結果から学習者は話し手の話を「ひとまず理解した」、「ひとまず同意する」といった話し手に配慮する「あいづち」を母語話者ほど使わないと結論している。

以上の研究結果と異なったものは村田(2000)がある。村田(2000)は「聞いている」「理解している」「聞き手の感情、態度の表出」を認めるほか、さらに以下のように下位分類をしている。

- (1)「聞いている」、「理解している」ことの表示
 - a 理解しないまま「聞いています」という信号を送る場合
 - b 理解し、かつ「聞いています」という信号を

送る場合

- (2)聞き手の感情、態度の表示

- a 「共感の表出」 b 「感情の表出」 c 「情報の追加」

その結果、(1)「聞いている」「理解している」ことの表示のカテゴリーでは、学習者は相手の話が分からないとき、会話を継続させるため安易に相づちを多用し、リペア要求を放棄する傾向が見られた。教育現場では「聞いている」という信号を表す相づちとリペア要求の両方を使い分ける指導が必要であると村田(2000)は提言している。(2)聞き手の感情、態度の表示のカテゴリーでは、上級学習者は態度、感情を表す相づちを頻繁に打っている傾向が見られた。

これは Mukai (1999)と異なる結果となっている。Mukai (1999)は上級学習者の態度を示す相づちは平均 15.4%しかなく、母語話者の約 28%より少なかったと報告しているが、村田(2000)は3名の上級学習者が使用した感情、態度を表す相づちが30%を超えていることから、上級学習者が態度、感情をより頻繁に相づちによって表現していると述べている。

なぜこの二つの研究は異なる結果となったのであろうか。まず考えられるのは両研究の調査方法や分類の基準に異なる部分があったということであろう。

以上のように、相づちの機能に関する研究結果をまとめると、村田(2000)以外では、日本人と比べ、日本語学習者は「話し手の話を聞いている」、「理解している」などを表す相づち(e.g.: 「はい」「うん」)を使用しているが、「自分の感情を表す」相づち(e.g.: 「へえー」「ほー」)をあまり打たないことが分かる。仮に学習者が「聞いている」「理解した」という相づちしか打たないとすると、自分の言ったことに対して聞き手がどう思っているのか分からず不安になり、円滑なコミュニケーションに支障をきたすことも考えられる。日本語教育現場では、聞き手の様々な感情を表す表現に対する注意を払わせる必要があるだろう。

相づちの機能に関する研究はまだ少なく、しかも調査対象となる学習者の言語が英語と中国語だけであるため、一般化は早急にはできない。他の言語の日本語学習者も対象とした調査研究が望まれる。ここで機能の分類を表6にまとめる。

表6 各研究の相づち機能分類

Mukai (1999)	楊(2001)	佐々木(2002)	村田(2000)
		① 質問と答えのみの応答であ いづちを含まないもの	
① 「知らせ」	① 「聞いている表示」 ② 「理解・了解の表 示」	② 聞いていることの表明 ③ 理解・了解の表明	① 「聞いている」「理解している」 a. 理解しないまま「聞いている」 b. 理解し、かつ「聞いている」
② 「態度」	③ 「同意・共感の表 明」 ④ 「感情の表出」	④ 受容・同意の表明	② 「聞き手の感情、態度の表出」 a. 「共感の表出」 b. 「感情の表出」 c. 「情報の追加」
学習者は「態 度」の相づち より「知ら せ」の相づち を多く使用し ている。	学習者の「感情の表 出」の相づちは日本 人より少ない。	学習者は「ひとまず理解した」 「ひとまず同意する」といった 話し手に配慮する「相づち」を 母語話者ほど使用していない。	学習者は会話を継続させるため 安易に「聞いている」「理解して いる」を多用する傾向がある。 また態度、感情を表す相づちを 頻繁に打っている傾向が見られ た。

3.2 表現形式

3.1 で、相づちの機能を述べたが、この節では、相づちの機能を果たすものとして具体的にどのような表現形式があるか、何が相づちに含まれるかという問題について触れる。日本語で一般に相づ

ちと言われるのは「はい」「ええ」「うん」「そうですね」「そうですね」のような相づち詞であるが、この他に、繰り返し、言い換え、先取り、非言語行動なども考えられる。以下の表7は各研究で対象となっている表現形式である。

表7 相づちの表現形式

論文	相づち詞	繰り返し	言い換え (補強)	先取り (完結)	笑い	頭の動き (頷き)	その他 (意見・感想)
山本(1992)	○	○	○	○	○		
登里(1994)	○	○	○	○	○		
渡辺(1994)	○	○	○	○	○		
楊(1997)	○	○	○	○		○	○
Mukai (1999)	○	○		○		○	
窪田(1999a, 1999b, 2000)	○	○	○	○		○	
楊(2001)	○	○	○	○			○
村田(2000)	○	○	○	○			
吉本(2001)	○	○	○	○			
柳(2002, 2003a)	○	○	○	○	○		
柳(2003b)	○	○	○	○			○

表7における「相づち詞」「繰り返し」「言い換え」「先取り」「意見・感想」¹は言語行動を、「笑い」「頭の動き」は非言語行動を表す。「ハイ」「エエ」「ソウ」「ナルホド」といった相づち表現は応答詞、感動詞、副詞などの品詞に分類されるが、堀口(1988)は日本語教育の立場から相づちを一つの枠に入れたほうが扱いやすいと考え、これらを「相づち詞」と呼んでいる。話し手の発話の内容を自分の言葉で表現するものを堀口(1988)は「言い換え」とし、

水谷(1984)は「補強」としている。聞き手が話し手がこれから言おうとしていることを予測して発話する表現を堀口(1988)は「先取り」とし、水谷(1984)は「完結」としている。

学習者の相づち研究では、表7から分かるように、Mukai (1999)以外のすべての研究が言語行動の「相づち詞」「繰り返し」「言い換え」「先取り」を表現形式として認める。楊(1997, 1999, 2001)、柳(2003b)はこの四項に加えて岡崎(1987)の考え²に従

って話し手の発話に対する聞き手の感想や短いコメントなどの「意見・感想」を相づちとして加えている。非言語行動の「笑い」と「頭の動き」に関しては、表7で示すように研究対象とするか、しないかで二分されている。非言語行動の記述の方法がまだ十分に確立されていなくて、分析資料が録音によるものであったといった理由で分析対象からはずされることが多い。これからの相づち研究が分析対象とする資料は、音声的なものだけでは不十分で、それに加えて視覚的な録画資料も必要となるであろう。

次の節では、一般に言われる「はい」「ええ」「うん」などの相づち詞の種類を紹介していく。

3.3 相づち詞の種類

学習者における相づちの使用実態を明らかにするためには、実際に学習者がどのような「相づち詞」を使っているかを分析しなければならないと思われる。この節では「相づち詞」「繰り返し」「言い換え」のような表現形式から分析する際、「相づち詞」のみを取り出し、どのような種類の相づち詞があるのかを各研究で分析した結果を通してまとめる。学習者がどのような「相づち詞」を用いているのかに関する研究は、これまで小宮(1986)の分類に基づき、進められてきている。ここでの「相づち詞」は「はい」「ええ」「そうですか」「なるほど」のように応答詞や感動詞や副詞などに分類されるものを指す。

小宮(1986)は日本人の日本語をデータとし、そこに現れた「相づち詞」を「感声的表現」と「概念的表現」に分け、さらに「感声的表現」を「ハ系」「エ系」「ア系」「ン系」に分類した。小宮(1986: 48)では、「『ハイ』『エー』『ン』などのように、それによって指す概念を持たず、それ自体で直接に話し手の感情を表す表現」を「感声的表現」とし、「『ナルホド』『ホント』のように現在は感動詞的にも使われるような表現」を「概念的表現」としている。また「ハイ」「ハーハー」などの「ハを含む」ものを「ハ系」に、「エエ」のように「エを含む」ものを「エ系」に、「アを含む」ものを「ア系」に、「ンを含む」ものを「ン系」に定義している。

その後、「相づち詞」の種類に関する研究は、ほぼ小宮(1986)の分類が基準にされている。以下、「相づち詞」の種類に関する研究を紹介していく。またここで言う種類は小宮(1986)の「感声的表現」(「ハ系」「エ系」など)、「概念的表現」(「ソウ系」

など)に基づいて分析されたものである。

山本(1992)は学習者の「相づち詞」を「ハ系」、「エ系」、「ン系」に分け、それぞれの使用回数を調査した。これら3系の合計に占める割合を出した結果としては、学習段階によって特定の傾向は見られないことが分かった。また日本人の「エ系」の使用率が高いのに対して学習者の「エ系」の使用が全体的に低かった。学習者が使用した「相づち詞」の異なり数を単純に比較すると、学習段階が上がるに従って使用する「相づち詞」の異なり数も増えていく結果が出ている。ただし、山本(1992: 31)は「各被験者間であいづちの総数が異なるので、短絡的な結論づけをすることは避けたい」と述べていることから、まだ検証の余地があると思われる。

窪田(1999a)は「相づち詞」を「感声的表現」(「ハイ」など)「概念的表現」(「ソウデスカ」など)「感声+概念的表現」(「ア、ソウデスカ」など)に分類した。調査では、会話において何種類の相づちが用いられたかを調べたところ、上級学習者は使用する相づちの種類が初級学習者より多いということが分かった。柳(2003b)は窪田(1999a)の分類に倣って、中国語を母語とする上級台湾人学習者の相づちを日本人と比較しながら以下のような結果を出している。(1)日本人は「ハ系」を一番多く使っているのに対し、学習者は「ン系」をより多く使っている。(2)学習者にも日本人にも「エ系」の使用割合が少ない。(3)日本人が使っている「ヘー系」は学習者に使われていない。

窪田(2000)の縦断研究は、半年の間隔において2回行われた。調査1回目より2回目において、多くの種類の「相づち詞」を組み合わせて多様な「相づち詞」を使うようになったという結果が出ている。全体として日本語の能力が上がるにつれて「異なり相づち詞」も増加する傾向にあると言う。この結果は柳(2002)の調査と同じであり、柳の調査では滞日経験のない中級・上級台湾人学習者を対象に相づち詞の種類を分析したところ、学習者の日本語レベルが高くなるとともに相づち詞の種類も増加していくことが分かった。堀口(1990)は上級学習者が使用した相づちの種類を平均すると(一番少ない二人を除く)、15.8種類の相づちが使われていることが分かった。さらに相づちの種類という点では上級学習者も日本人と同じように何種類かを使い分け、1つの相づちで押し通すということはないと述べている。

登里(1994)は初級学習者を対象に一年間に渡り、長期に追跡した縦断データから相づちの習得のモデル化を試みている。相づちの習得過程には第1言語

と目標言語との間に少なくとも3つ以上の習得段階があるという。次の表8は登里(1994)に基づいた、それぞれの段階における特徴である。

表8 各習得段階における特徴³

	特徴①	特徴②	特徴③
段階1	「感声的表現」と「概念的表現」の使用割合は9対1程度。	「感声的表現」は「ハ系」の使用割合が多く一方、「エ系」が使用されない。英語の使用が見られる。	「概念的表現」は語彙数が2~3と乏しく、英語の表現も見られる。
段階2	「感声的表現」と「概念的表現」の使用割合は8対2程度。	「感声的表現」に「エ系」の使用が始まる。英語の使用は段階1に比べ減少。	「概念的表現」に「ホント系」「ワカル系」「否定系」(ただし「いや」は習得されにくい)などを使い分けことができる。語彙数10~20程度。「そうですか」と「そうですね」を的確に使い分ける。
段階3	「感声的表現」と「概念的表現」の使用割合は8対2程度。	英語の使用はさらに減少。「感声的表現」の系別割合は個人差と待遇差による使い分けが顕著になる。	「概念的表現」は「ワカル系」が減少する。「ソウ系」のバリエーションはさらに増加し、終助詞「よ」の獲得をきっかけとし「そうですよ」「そうですよね」が出現する。また「んです」の獲得をきっかけとし、「そうなんです」等も使われる。

以上、これらの研究結果をまとめると、学習が進むにつれて使用する相づちの種類も増加していくことが分かる。

また相づちを用いる際に、母語からの影響があるかを明らかにしようとしたものには楊(1997)の論文がある。楊(1997)は中国人学習者にしぼってかれらの母語が相づち使用に与える影響を探っている。その結果、中国人学習者は日本人と比べ、「ン系」と「ア系」を多用する傾向が見られる。その理由として、中国語の相づちでは、嗯[n,ng]と啊[aj](日本語の「ン」と「アー」と似ている)が主な相づちとして使われるため、日本語の相づち使用において母語からの影響を受け、「ン系」と「ア系」が多く使われると述べている。

簡潔に言えば中国語を母語とする学習者は中国語の影響を受け、「ン系」と「ア系」を多く使用していることが明らかにされた。また学習者の「エ系」使用は全体的に低いということが研究者の間で一致している。

3.4 頻度

相づちの頻度に関しては、その算出方法は各研究者によって異なる。一分間当たりの相づち回数・相づちと相づちの間の平均音節数(水谷 1983)、相づちと相づちの間の平均時間(小宮 1986; メイナード

1993)、総発話数に対する相づちの比率(黒崎 1987)など様々な尺度が用いられている。これらは日本語母語話者を対象とした研究における頻度の算出方法である。日本語学習者を対象とした各研究もこれらの方法を踏まえて、学習者と日本人の相づち頻度を比較しながら、様々な知見が出ている。この節では各研究が使用する算出方法とその結果をまとめる。

相づちの算出方法には大きく分けると単位時間によるものと発話単位によるものがある。

① 時間単位：

- a. 一分間当たりの相づち回数(山本 1992)
- b. 相づちと相づちの間の平均時間(楊 1997)

② 発話単位：

- a. 相づちと相づちの間の平均文節数(堀口 1990)
- b. 相づちと相づちの間の平均音節数(Mukai 1999)
- c. 一相づちにおける拍数(窪田 1999a, 2000)
- d. 100音節当たりの相づち回数(渡辺 1994; 登里 1994)

相づちの頻度は会話の参加者の話速、話題、場面、性差などの諸要因と関わっている。特に聞き手となる時間が長ければ長いほど相づちを打つ機会は多くなる。発話単位による算出方法には、次のような2点のメリットがある。一つ目は、話し手によって異なる発話のスピードに影響されないこと、二つ目は、

書き起こし資料から聞き手役になる部分を切り出し、比較することが容易となる点である。単位時間による算出方法だと、話し手の話速と聞き手に回る時間によって相づちの頻度数は大きく変わってくると思われる。すなわち、発話単位による算出方法は単位時間による方法より正確に相づちの頻度を把握できると思われる。

堀口(1990)は水谷(1988a, 1988b)の調査結果と比べながら、日本人が3~5文節に1回相づちを打つものに対して、上級学習者は6.3文節に1回で、上級学習者のほうが黙ってじっと聞いている時間が長いと指摘している。しかし、両者の調査方法が異なり、前者は学習者同士の発話データに基づいた結果であるのに対し、後者はテレビ・ラジオ番組の生データに基づいた結果であるため、単純に比較することには疑問が残る。より正確な比較を行うためには条件を同じに揃えた状況での調査が望ましい。以下の研究はすべて状況を同じくした上で調査を行った。

Mukai (1999)は学習者と日本人がそれぞれ聞き手として最も長く会話に参加した部分を取り出し、一つの相づち当たりの平均音節数を比較した結果、学習者が聞き手として会話に参加している時に、日本人と同じぐらいの頻度で相づちを打っていることが分かった。この結果と反して、渡辺(1994)は100音節当たりの相づち回数を日本人と比べると、学習者のほうが低いという結果となった。また相づちの使用頻度と学習者の発達段階との間にほとんど関係はないと言う。頻度と日本語能力との相関関係について、窪田(1999a, 2000)は、聞き手の役割を果たす時間が長ければ長いほど相づちを打つ機会は多くなると考え、疑問文などの発話権を譲ると見なされる発話、及び「相づち詞」を除いたもの全ての拍数を数え、一つの相づちごとの拍数を相づちの頻度として数えた。その結果、学習者の日本語の能力が相づちの頻度とあまり関係がないと結論づけている。しかし、同じく縦断研究を行った登里(1994)は渡辺(1994)の方法に倣って100音節当たりの相づち回数で頻度を算出した結果、学習が進むにつれ頻度が増えると述べている。

以上は発話単位による算出方法であるが、楊(1997)は分析となる資料は話し手が同一人物であり、話題も同じであるため、場面や話し手の要因が頻度に影響を与え可能性が排除できると考えている。そのために、被験者が聞き手に回っている部分だけを

取り出し、その時間を相づちの回数で割り、相づちと相づちの間の平均時間で頻度を出した。その結果、学習者の頻度は日本人より低いことが分かった。山本(1992)のデータでも、話し手が同一人物、話題が同じであるため、一分間当たり打った相づちの回数を数えた。全体的に見ると、学習段階が上がるにつれて相づちの頻度が高くなっていくと言う。この結果を日本人と比べると、日本人の相づち頻度は学習者より高い結果が出ている。以上の結果を整理してみると、以下の表9になる。

表9 頻度の調査結果

学習者を日本人と比べた結果	頻度が同じ：Mukai (1999)
	頻度が低い：堀口(1990)、山本(1992)、渡辺(1994)、楊(1997)
学習段階と頻度の相関関係	頻度が増える：登里(1994)、山本(1992)
	頻度が変わらない：渡辺(1994)、窪田(1999a, 2000)

相づちの頻度は話し手の年齢、性別、話題、上下・親疎関係などによってかなりの違いが見られる。また、学習者の個人差も大きく関わってくるため、まだ一般化は難しい。各調査結果で異なる結果が出た理由として考えられるのは、どこまでを相づちとして認定するのかという点(表7を参照されたい)と、各研究の算出方法が異なるという点であると思われる。今後新たな頻度に関する調査はやはり同じ被験者を縦断的に調査し、各段階での習得状況を見るべきであろう。頻度の算出方法について、話し手の話すスピードとポーズなどの要因で、頻度が変わってくるため、時間単位による方法より発話単位のほうが相づちの使用頻度を正確に把握できると思われる。

3.5 タイミング(出現場所)

今石(1992)は「あいづちは、いつでも打ってもよいわけではなく、適切なタイミングが存在する」と述べている。適切なタイミングで打つことによって相づちの機能が満たされ、会話のリズムが保持されていくことは研究者間でだいたい一致して認められている。日本人の相づちのタイミングに関する研究は多くなされている。適切なタイミングについて、水谷(1984)は「聞き手があいづちを打つ時は、話し手の側に音声的な弱まりの現れる時」とし、水谷(1988b)では相づちが入る前の部分は通常「て」「けど」「が」「から」などで終わっているところや「て

ね」「けどね」「からね」のように終助詞「ね」がついたところに相づちが入りやすいと指摘している。

黒崎(1987)は方言談話において、音声的な弱まりの現れる箇所に「ナー」「ノー」のような文末詞が間投詞的に用いられ、それに呼応するように相づちが打たれることが多いと報告している。メイナード(1987)は「あいづちは話者が話の間をとる時、しかもその間は文の終わり、終助詞、間投助詞や話し手の頭の動きを伴う時、送られることが多い」と述べている。杉藤(1993)は話者が言いよどむ時、イントネーションは平坦でそこには聞き手の相づちは入らないが、語りの下降イントネーションに相づちが挿入されやすいと言う。今石(1992)は「形式」では接続助詞、終助詞の後に相づちが入りやすく、「音声」では①短いポーズの後、最後の拍が高い位置から下降する②上昇調のような相づちを求めるイントネーションの後、相づちを打たなくてはならないと指摘している。また今石(1994)は相づち挿入可能であることを示すシグナルを「あいづち挿入可能シグナル」と呼び、意味的区切りを示す終助詞、間投助詞、接続助詞、下降型イントネーションの末尾、上昇型イントネーション、尻上がり型イントネーションなどに挿入しやすいと述べている。

これらをまとめると、相づちは話し手から要求する手がかりが送られた時に打てばよいという見解がほとんどであるが、小宮(1986)は相づちは「自由意志に基づいて」用いられるものであるとして、話し手からの要求に答えたと考えられるポーズ、「ネ」、上昇イントネーションのところに見られる聞き手の発話は相づちとみとめていない。つまり、前述の話し手からの要求によって、相づちが打たれる考え方とは異なっている。

日本語学習者におけるタイミングの研究はそれほど多くないが、ここでタイミングの視点を入れた窪田(1999a, 2000)の論文を紹介する。窪田(1999a, 2000)はどのような場所で相づちが現れるかを調べ「相づち詞」と「頭の動き」を対象に、話し手の(1)発話中のポーズ(2)発話後(3)発話と重なる場合(4)聞き手の相づちなどを出現場所として分類した。

窪田(1999a)では初級・上級学習者の相づちが現れた場所の順番は、話し手の発話後、続いて話し手の発話中のポーズ、発話が重なる場合、のようである。一方、日本人はポーズでの相づちの出現率が一番高く、重なる場合も学習者より多い。この結果か

ら個人差もあるものの、学習者にとって、話し手の発話中に相づちを打つことは難しいと述べている。窪田(2000)の縦断研究では、初級学習者に対し半年の間隔をおき、2回の調査を行った。2回目の調査では一回目と比較し、話し手の発話中に相づちを打ち、時には相手の発話にも自分の相づちを重ねて打てるようになった点に変化が見られる。全体的に見ると、学習者の日本語能力が上がるにつれて、日本人に近い場所で相づちを打てるようになっていくという結論が出ている。

また母語の影響という観点からタイミングを分析した論文もある。楊(1997)は中国人学習者が使用している日本語と日本人が使用している日本語のタイミングの異なりを比較対照している。その方法は、会話の中で相づちが打たれたところを文法項目に分類し、その回数が言語的相づちの総数に占める割合を比較するというものである。その結果、「終止形」に関しては中国人学習者の割合は日本人とあまり変わらないが、「て形」と「格助詞」の部分では日本人に比べ中国人学習者のほうが使用の割合がかなり低いという結果が出ている。「格助詞」の後にあまり相づちを入れない原因の一つは「中国語にそのような構文上の要素がないことに求められる」(楊 1997: 124)と母語からの影響に言及している。また、「て形」の後に相づちを入れることが少ない原因については「接続助詞『て』が用言の連用形についた時、それを文末ではなく、文の途中としか認知できないと考えられる」(楊 1997: 124)と推測している。

3.6 相づち変化の要因

相づちの使用には年齢、性別、話し手との関係、談話の内容・目的などの様々な要素が絡んでいることがこれまでの先行研究によって明らかにされている(水谷 1984; 小宮 1986; 黒崎 1987 など)。ここで相づちの変化の要因に言及している窪田(1999b)の論文を紹介する。

窪田(1999b)は、相づちの使用に差異をもたらす要因の一つとされる「聞き手の年齢」に焦点を当て調査をしている。調査方法は、会話の相手を日本人の若者と日本人の年配者に設定し、日本人同士と学習者と日本人の会話を同じ手法で調べたというものである。分析手法としては、小宮(1986)に基づき、「相づち詞」を「ハ系」「エ系」「ア系」「ン系」「その他」に分類し、日本人のデータと比較した。また

「丁寧相づち詞」(e.g.: ハイ、エエ、～デス、～マス)と「普通相づち詞」とに分け、その割合を比較した。その結果、上級学習者は日本人と同じく年配者に対して「ハ系」のような待遇性の高い相づちを多く用い、若者に対しては「ア系」「ン系」のような待遇性が低い相づちを多く用いていることが分かった。すなわち、上級学習者は待遇性の高い「相づち詞」とそうでない「相づち詞」を使い分けている傾向が見られた。しかし初級学習者にはそのような傾向が見られなかった。また初級学習者は年配者に対する「丁寧相づち詞」の使用が低いことが分かった。

3.7 談話展開の観点から

吉本(2001)は日本に2年から10年まで定住しているベトナム難民を対象とし、かれらの日本語の相づちが談話の中でどのように使用され、どのように談話を展開しているか、その特徴・問題点を考察した。その結果、定住年数が5年未満の被験者には、自分の発話権を放棄し、相手に発話権を委ねながら談話を展開する談話傾向が見られた。その一方、定住5年以上の被験者は発話権を継続させ、相づちを用いて積極的に談話展開を行っていることが明らかになった。

4. まとめと今後の課題

本稿は日本語学習者における相づち研究を相づちの表現形式、機能、種類、頻度、タイミング(出現場所)、相づち変化の要因、談話展開の観点に分け、概観してきた。日本語学習者の相づちに関する研究で明らかになったことは、以下の通りである。

- ① 表現形式に関しては、各研究者が言語行動の相づちとして、「相づち詞」「繰り返し」「言い換え」「先取り」の四項目について一致し認めている。
- ② 機能に関しては、日本人と比べ学習者は「相手の話を聞いている」、「理解している」などを示す相づちをよく打っているが、「自分の感情を表す」や「自分がどう思っているかなどを表す」相づちをあまり打たないことが明らかになった。
- ③ 相づち詞の種類に関しては、学習が進むにつれて、使用する相づちの種類も増加していく。また学習者は全体的に「エ系」の使用が低い。
- ④ 頻度に関しては、学習が進むに従って、頻度が

増えるというのをあまり変わらないという異なる結果が出ている。

- ⑤ タイミング(出現場所)に関しては、学習者の日本語能力が上がるにつれて、日本人に近い場所で打てるようになる。
- ⑥ 相づち変化の要因に関しては、上級学習者は日本人と同じように年配者に待遇性の高い相づちを、若者に待遇性の低い相づちをと使い分けているが、初級学習者は使い分けができていない傾向がある。また中国語では話の内容が相づちの頻度に影響を与えるが、日本語では使用する相づちの形式は人間関係と関連している。
- ⑦ 談話展開に関しては、ベトナム人学習者のデータによると、日本に定住5年以上の学習者は相づちを用い会話を継続させて積極的に談話を展開していくが、5年未満では自分の発話を放棄し相手に委ねながら談話の展開を行う傾向がある。

以上のように、学習者が使用している相づちの実態は様々な観点から明らかにされているが、未解明の部分もある。調査対象についてまとめてみると、被験者として取り扱う学習者の母語という点では、前述したように、英語、中国語、韓国語、ベトナム語など、母語の異なる学習者を対象にした研究はあるが、母語別の研究は、英語を母語とする研究(登里 1994; 向井 1998; 窪田 2000; 村田 2000)が一番多くなされており、次は中国語を母語とする研究が多い。今後、他の言語を母語とする学習者の相づちの使用実態の研究も望まれる。それに、多くの研究は学習者と日本語母語話者との比較に重点をおいてきたが、学習者同士の相づちがどのように使用されるのかについて、あまり目を向けてこなかった。流暢な日本語を話せる上級学習者は同じ立場にある学習者と話す際に使用する相づちと、日本語母語話者と話す際に使用する相づちが異なると考えられる。学習者同士は相づちを多く打たなくても会話が弾む、違和感なくコミュニケーションが取れる、のような話を耳にすることがあるが、この辺の実証研究がまだされていないようである。また同じ場面でデータを取った学習者と日本語母語話者の比較研究が多いが、異なる場面での比較が少ない。例えば、教室場面での教師と生徒の相づち表現なども一つの研究課題として発展できると思われる。

さらに、日本国外の学習者と日本国内の学習者との比較研究もあまり見当たらない。これらの実態調査が行われれば、環境からのインプットが学習者の相づち習得に与える影響が明らかになると思われる。さらにコミュニケーションの観点から言えば、音を発する言語的行動だけではなく、傾きや視線などの非言語行動も取り扱うべきであろう。したがって、今後の分析データは録音のみならず録画も利用をすることが望ましい。最後に日本語教育の立場から考える際、学習者の相づち調査は数量的な分析だけではなく、質的な分析も欠かせない。例えば、これまでの相づち研究では相づちの機能と相づち詞の種類を切り離して論じられてきた。どのような種類の相づちがどの機能を担っているかというような関連性については、大きな課題の一つとして今後求められていく必要があるだろう。

注

1. 楊(1997, 2001)は話し手の発話に対して、コメントを述べるような短い発話、例えば「大変だね」「よかった」などを「意見・感想」とする。
2. 岡崎(1987: 175)は「同情、共感の多種化としてひどいですねー、よかったですねー」を「相づちの高度化」の例として提示している。
3. この表は初級学習者を対象とするため、段階 2 までしか観察できなかった。段階 3 は日本人資料に基づき、推察する特徴である(登里 1994: 22)。

参考文献

- 李善雅 (2001) 「議論の場におけるあいづち—日本語母語話者と韓国人学習者の相違—」『世界の日本語』11, 139-152.
- 今石幸子 (1992) 「談話における聞き手の行動—あいづちのタイミングについて—」『日本語教育学会創立 30 周年・法人設立 15 周年記念大会予稿集』147-151.
- 今石幸子 (1993a) 「談話分析によるあいづちのモデル化の研究」大阪大学大学院修士論文
- 今石幸子 (1994) 「話し手の発話とあいづちの関係について」『大阪大学日本語学報』13, 大阪大学 107-121.
- 今石幸子(1998) 「日本語学習者のチュートリアルにおけるあいづちとその周辺—フォローアップ・インタビューによる談話分析を中心に—」『阪大日本語研究』10, 111-127.
- 岡崎敏雄 (1987) 「談話の指導—初～中級を中心に—」『日本語教育』62, 165-178.
- 生越直樹 (1988) 「朝鮮語の相づち—韓国人学生のレポートより—」『日本語学』7-13, 12-17.
- 簡振興 (1994) 『日本語の話し言葉の諸相—相づち表現を

- 中心に一』台湾東呉大学日本文化研究所修士論文
- 窪田彩子 (1999a) 「初級・上級日本語学習者の初対面時に使用する相づちについての一考察」『平成 11 年度日本語教育学会春季大会予稿集』179-184.
- 窪田彩子 (1999b) 「初級・上級学習者の相づち詞の形態—日本人対話者の年齢が及ぼす影響—」『平成 11 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』141-146.
- 窪田彩子 (2000) 「日本語学習者の相づちの習得—日本人との初対面における会話資料を基に一」『南山大学日本語教育』7, 76-114.
- 黒崎良昭 (1987) 「談話進行上の相づちの運用と機能—兵庫県滝野方言について—」『国語学』150, 122-109.
- 小宮千鶴子 (1986) 「相づち使用の実態—出現傾向とその周辺—」『語学教育研究論叢』3, 大東文化大学語学教育研究所 43-62.
- 佐々木泰子 (2002) 「相談場面の会話にみられるあいづちの機能」『日本語学習者と日本語母語話者の談話能力発達過程の研究—文章・音声の母語別比較—』平成 10~13 年度 科学研究費補助金研究基盤研究(B)(1) 研究成果報告書 24-33.
- 杉藤美代子 (1993) 「効果的な談話とあいづちの特徴及びそのタイミング」『日本語学』12-4, 11-20.
- 任栄哲・李先敏 (1995) 「あいづち行動における価値観の韓日比較」『世界の日本語教育』5, 239-251.
- 陳姿菁 (2002) 「日本語におけるあいづち研究の概観及びその展望」『第二言語習得・教育の研究最前線—あすの日本語教育への道しるべ—』日本言語文化学会 222-234.
- 登里民子 (1994) 「日本語の相づち詞の発達過程」『Proceedings of the 5 th Conference on Second Language Research in Japan』国際大学 10-24.
- 堀口純子 (1988) 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64, 13-26.
- 堀口純子 (1990) 「上級日本語学習者の対話における聞き手としての言語行動」『日本語教育』71, 16-32.
- 堀口純子 (1991) 「あいづち研究の現段階と課題」『日本語学』10-10, 31-41.
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 松田陽子 (1988) 「対話の日本語教育学—あいづちに関連して—」『日本語学』7-13, 59-66.
- 水谷信子 (1983) 「あいづちと応答」『話しことばの表現』筑摩書房 pp.37-44
- 水谷信子 (1984) 「日本語教育と話しことばの実態—あいづちの分析—」『金田一春彦博士古稀記念論文集』第 2 巻言語学編 三省堂 261-279.
- 水谷信子 (1988a) 「話しことばの比較対照」『日本語教師用参考書Ⅱ 話しことばのコミュニケーション』凡人社 85-108.
- 水谷信子 (1988b) 「あいづち論」『日本語学』7-12, 4-11.
- 村田晶子 (2000) 「学習者のあいづちの機能分析—『聞いている』という信号、感情態度の表示、そして turn-taking に至るまで—」『世界の日本語教育』10, 241-

- 260.
- メイナード・K・泉子 (1987) 「日米会話におけるあいづち表現」『月刊言語』16-11, 88-92.
- メイナード・K・泉子 (1993) 『会話分析』くろしお出版
- 山本恵美子 (1992) 「日本語学習者のあいづち使用実態の分析—頻度および種類—」『言語文化と日本語教育』4, お茶の水女子大学 22-34.
- 吉本優子 (2001) 「定住ベトナム難民における相づち習得の研究—談話展開の観点から—」『日本語教育』110, 92-100.
- 楊晶 (1997) 「中国人学習者の日本語の相づち使用に見られる母語からの影響—形態、頻度、タイミングを中心に—」『言語文化と日本語教育』13, お茶の水女子大学 117-128.
- 楊晶 (1999a) 「中国語と日本語の電話における相づちの使用の—比較—形式と頻度の観点から—」『言語文化と日本語教育』17, お茶の水女子大学 1-13.
- 楊晶 (2001) 「電話会話で使用される中国人学習者の日本語の相づちについて—機能に着目した日本人との比較—」『日本語教育』111, 46-55.
- 楊晶 (2002) 「日本語の相づちに関する意識における中国人学習者と日本人との比較」『日本語教育』114, 90-99.
- 柳川子 (2002) 「台湾人日本語学習者における相づち使用の考察—相づち詞の種類を中心に—」『日本語教育と異文化理解』創刊号, 愛知教育大学国際教育学会 45-53.
- 柳川子 (2003a) 「台湾人日本語学習者における相づち表現—電話での会話資料から—」『日本語教育と異文化理解』2, 愛知教育大学国際教育学会 77-85.
- 柳川子 (2003b) 「台湾人日本語学習者の相づち表現—滞日経験のない上級学習者の場合—」『言語文化と日本語教育』25, お茶の水女子大学 66-77.
- 渡辺恵美子 (1994) 「日本語学習者のあいづちの分析—電話での会話において使用された言語的あいづち—」『日本語教育』82, 110-122.
- Mukai, C. (1999) The use of Back-channels by Advanced learners of Japanese: Its qualitative and quantitative aspects, 『世界の日本語教育』9, 197-219.

りゅう ちゃんつ／お茶の水女子大学大学院 応用日本言語論講座
kawako62@yahoo.co.jp

Existing research of backchannels for learners of Japanese

LIU Chuantzu

Abstract

The purpose of this paper is to conclude the method and result of the previous research of backchannels for students of Japanese, and also, to suggest new fields of research. The research of backchannels includes verbal and non-verbal, and since the range is too wide, this paper mainly researches verbal for students of Japanese, and mentions non-verbal in case of need. This paper also states how the research of backchannels for students of Japanese has proceeded, and the results of this research. Through out this paper, the research will propose means for the elucidation of the actual usage of backchannel for students of Japanese:

【Keywords】 backchannels, variation of backchannel expression, function, frequency, learners of Japanese

(Department of Applied Japanese Linguistics, Graduate School, Ochanomizu University)